

平成18年度

富山市民感謝と誓いのつどい

とき：平成18年8月1日(火) 午後1時30分
ところ：富山国際会議場 メインホール
(大手町フォーラム)



中学生作文最優秀賞

「青い空・赤い空」

富山県立芝園中学校三年生 村上 柚葉

空は青いもの。私はこのことについて「Ⅱ」のように決して変わることはない、当たり前なことだと思ってしまう。父の言葉を聞くまでは。

「小矢部から見た富山の空は赤かったんだって。本当に真っ赤だったぞ。」

これは、私の父が富山大空襲について話してくれたときの言葉だ。父はこのことを祖母、つまり私の曾祖母から聞いたそう。

「なんで赤く見えたの？」

と、私が聞くと父は、「空が赤く見えるくらい、炎が燃え上がっていたぞ。」と答えた。

私は、のとき初めて、青ではなく赤い空を想像した。赤い色をした空を見た時の曾祖母は、どのような気持ちだったのだろうか。もし、自分が曾祖母の立場だったらどのように思ったのだろうか。

うだろう。私は怖くて、悲しくて、もう何が何だか分からなくなつて、泣き出し、しまじょうな気持ちになるだろうと思つた。「もう嫌だ。」と生きる力を失つてしまふと思つた。

けれども、今、私が生きていて、平和に富山で暮らしているのは、曾祖母が生きていたことをあきらめなかつたからだ。曾祖母だけでなく、富山の人々みんなが生きて、今ここに富山という市を「一から作り上げてくれたからだ。私は、富山が大好きだ。のんびりして、魚がおいしくて、とても住みやすく、だから、懸命にがんばってくれた曾祖母や富山の人々には感謝したい。」

空は青いもの。こんなに当たり前なことを知つて、私は自分が住んでいるこの富山について何も知らない、ということを実感しなと思う。

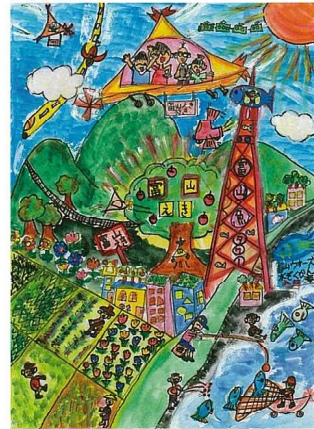
た。富山の道路が広いのは、空襲で全て燃えてしまったからだというのも、私は全く知らなかった。空は赤くなくても、こんなに赤くなくても、こんなに身近なところに空襲の跡が残っているのだ。私達はこのことをもつとしかり知るべきである。そうしなければ、これから富山で暮らす私達よりもずっと後の世代の人達が富山大空襲について何も知らなくなってしまうからだ。

そして、富山という市と自分を、父から私へ、というように私もこの大空襲について次の世代の人に伝えていきたいと思う。そういうふうな言葉と心が受け継がれていけば、みんなが平和であることに感謝し、こののびのびとした富山も受け継がれていくと思うからだ。

今、私はこの富山が、ずっと続いていたらいいなと思う。

小学生絵画最優秀賞

3・4年生の部



富山県立三郷小学校三年1組 木下貴品さんの作品
「みどりがいっぱい!未来の富山」

5・6年生の部



富山県立大沢野小学校5年1組 坂口 溪さんの作品
「自然もいっぱい!未来のふるさと」

富山市のあゆみ展

日時・場所

7月31日(月)～8月15日(火) 午前8時30分～午後7時
富山市役所西館1階多目的コーナー

内容

戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて考える機会とするため、戦時中の写真や、奇蹟を受けた遺品の展示を行います。また、遺族の方々に戦死死者名簿の閲覧も行います。(ただし、土・日を除き、時間は午後5時15分までとします。)

※各町、戦死死者名簿については、遺族の方を対象に選挙、市役所社会福祉課及び富山地域の各地区センターで閲覧できます。

巡回展

日時・場所

①8月2日(水)～8月9日(水) 午前10時～午後9時
大沢野健康福祉センターウインディ

②8月10日(木)～8月18日(金) 午前10時～午後9時
ファボーレ

内容

7地域の歴史、観光行事等の紹介や、市民生活の変遷を写真等のパネルで展示するほか、小学生が描く「未来の富山」も展示します。

主催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

富山県自治振興連絡協議会
富山市長寿会連合会
富山県女性団体等連絡協議会
富山県青年団協議会
富山県中学校長

富山県社会福祉協議会
富山県民生委員児童委員協議会
富山県婦人会
富山県PTA連絡協議会

富山県遺族会
富山県児童クラブ連絡協議会
富山県母親クラブ連絡協議会
富山県小学校長会

このプログラムは再生紙を使用しています。

「富山大空襲」

富山市立西田小学校昭和二十四年空襲被害者追悼
昭和二十一年八月三日
富山県富山市 宮本幸子

式典 (午後1時30分から)

1. 富山市の紹介映像 | 歩いて喜らせるまちに
～コンパクトな都市への挑戦～

2. 「永久の火」入場 奉持者 富山市立和合中学校3年生 5人

3. 国歌斉唱

4. 黙とう

5. あいさつ 富山市長 森 雅志

6. 朗読 富山大空襲の体験記「富山大空襲」 宮本 幸子
朗読 声のライブラリー友の会 馬越 洋子

7. 代表献花及び一般献花

8. 「永久の火」昇天

9. ステージ演奏 富山市立奥田中学校吹奏楽部 ブルーオーシャンズ
曲: ジャパニーズグラフィティー ほか 指揮 佐藤 真 巖寺 秀憲

昭和二十一年八月三日夜半から三日未明にかけて富山は大空襲に遭いました。当時、お母さんは八歳、小学校二年生でした。父45歳、母38歳、二人の家族で丸の内に住んでいました。まさ小さかつので記憶は定かではありませんが、親が聞いたか、後に資料調べた結果わかったことも、あわせて記しておきます。

来襲したB29爆撃機は17機飛来したそうです。焼夷弾は八角形で40cm位の弾丸が三つも入ります。道路のあちこちに突き刺さっていた不発弾を見かけました。2万戸が焼失し、11万人くらいの方が焼け出されたそうです。

八月三日の夜、十時過ぎに警戒警報のサイレンが鳴ったので、家族全員、裏庭に作られた防空壕に入りました。その頃はひと腕に何度もサイレンが鳴るので、いつも着のままで寝ていました。再びサイレンが鳴り渡る時、服の底に響くようなB29の爆音が轟きました。福体はそのまま上空を通りすぎにしまいました。そして、空襲警戒警報解除のサイレンが鳴ったので、防空壕から出て取りにつきました。ところが、その夜はいつも違って、戻ってきた敵機は、市の周りから攻撃を始めて、海や川に逃げ惑う人々を、水面が光っているの、機上からは丸見えらしく、狙い撃ちしたそうです。私もその中の一人で、炎の海の中を逃げ惑ったので、どうしてそうなのかわかりませんが、家の前へ出たら隣のおばちゃんとお姉さんが枚の巾着を二人で被って逃げようとしていたところに出会いました。

「おばちゃん、私も連れてって」と二人の間に入っ

て神通川に向かって逃げました。既に周囲の家々

は燃えて火の海と化しています。あたり一面こううと烈しい熱風が吹き、家は燃え崩れ、火の粉が布団や身体に降りかかりました。幸いにも、雨のこぼれ落ちてくる焼夷弾に当たったことなく神通川の連隊橋の少し下流にたどり着きました。

焼夷弾がカラカラと雨が降るよう落ちてきました。そこは、兵隊さんが膝まで水がかりながら人々に水をかけて下さっていました。焼夷弾が、すぐ後ろにいたおばあさんの本も直撃し、片方の足が飛んで失くなくなりました。血だらけに片方のおばあさん、声も出さなくなりました。思いますが、私は、ただただ恐くて、

「死んでいいが、おばちゃん、私死んでいいがけ」と叫びたいがそうです。おばあさんは、

「なあ、もう死んだら駄目だよ」といわれたように、私は今、大阪に住んでいますが、毎年、八月三日になると私の恩人であるおばあさんに感謝の電話を欠かさずにかけていたのです。

私の家族はバラバラになり、先に兄二人は織部の友進、両親と弟一人はいたは防空壕に入りましたが、たもの熱風が吹き込んできて、居ることができず、外はでると我が家は燃え盛っており、辺りは人影もなく、ここに居るは危ないというので神通川に向かっただけけれども、火で道を遮られて、とりつかず、幅2m位の小川に、たもの、そこも熱風で煙や火の粉の塊が吹き付けてくるので、目を開けることもできない状態、被っている布団に火がついて燃えるので水に浸けたり、熱いから川の水を口に含んだりしていました。熱風、また熱風で、両親は子供を守るの大変だったと思います。そのため、汚れた水を沢山飲んだ5歳の弟は、その後身体をこわし、のちに栄養失調になりました。

家族それぞれが危ない目にあつたのですが、翌日、連隊橋のたもとで偶然にも全員再会することができ、無事を喜び合いました。トラックで配つてもらった炊き出しのおにぎりときゅうりをおいしく食べたのを覚えています。逃げるのに早い遅いはなんの関係もなかったのです。ちととした時間の

差や場所の違いで、人の運命は大きく左右されました。

例えば、家から10m西にある諏訪川原の四つ角では、家を焼かれ逃げてきた人々を隣組の私設消防隊員に行く手を阻まれて、「家に戻って火を消せ！」と云われて再び家に戻った人々は死んでしまったり、私の両親も家に戻った人々が燃え盛っている時に防空壕に入っていて、逃げるには難しかったのに助かった者も居り、これは運命でしょうか、言いがあません。

B29は市民を殺し、全市を焼き尽くし、残虐きまわりない戦争に、心の底から憎みか湧いてきます。

当時、不二越は軍需工場なので必ず空襲を受けるだろうと云われていたそうですが、無事でした。人々が住む市街地だけが全滅しました。家族全員が助かったものの、命からがら逃げたので非常持出し袋は誰も持ち出すことができません。乳母車に布団一枚が全財産でした。

翌、八月二日は命の恩人となった方の親戚が呉羽山を越えたところであり、お願いして泊らせてもらいました。翌日は行くあてもなく、夜は国道八号線に面する呉羽山の道路の斜面に布団を敷いて、まだ燃えている明る富山市街を眺めて寝ました。

帰省してその場所を通るたびに当時を偲び今の平和をかみしめています。焼け出されて行く先のない人々は、市外の焼け残った神明小学校で共同生活が始まりました。

当時、父は日本曹達線の関連会社を経営して

いたのでしょうか、お金は沢山あったらしいのですが、品物がないので、お金は何の役にたつたかなと云うです。暫くして疎開先で物がなくなったり、嫌なことが起り始めたらし、父は丸の内焼け跡に、一番早く焼け野原を築いて、街中瓦礫の山。見渡す限り焼け野原で車行と、外形をとめるのみの大和バスと我が家が、逃げるなど何もなく、4キロほど離れた神通川にせせらぎが聞こえなくなりました。唯、焼け残った我が家は使用することができました。

後々になって、遠くの方から見知らぬ人が、い湯をにこく人も居りました。復員して来た方も、焼け跡にたまたま軒しらない我が家を見たら、市内に至るところに焼死者が転がり、神通川の土手で遺体を焼いたり、川原や寺の境内で焼いたと聞きしました。幸にして、私はその光景を目にすることなく過すことができた、幸でした。

あなたたち娘息子は物質的にも恵まれ、何不自出なく、ひもじい思いもせず、過してありますが、現在の平和がどのような犠牲の上に培われたことを認識してほしいです。だから、自分の子や、いかに生れるであろう孫達にはどんな悲惨な思いは二度とさせたくない、百させたいけないと戦争反対の声を高く叫びたいのです。終戦が半月早ければ、富山は空襲にあわずに済んだのに。以上が戦争を知らないあなた達に書き残す、お母さんの空襲体験記です。

昭和五十七年八月二十八日記す



水見市島尾海岸に漂着した富山大空襲の犠牲者を供養するため、現地に建立された慰霊像